

HSC024-11

会場:201A

時間:5月24日 11:30-11:45

## 中学校における防災教育の試み：家庭科での実践事例

## Education for Disaster Prevention at Lower Secondary School : Report on a Practice in Home Economics

村山 良之<sup>1\*</sup>

Yoshiyuki Murayama<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 山形大学大学院教育実践研究科

<sup>1</sup> Yamagata University

### 1. はじめに

学校における防災教育は、総合的な学習で担うことが多く、充実した実践事例が重ねられている。しかし、多くの学校現場では防災教育に時間を割くことができない。現行の学習指導要領中学校技術家庭科の家庭分野（以下家庭科）では「家族の安全を考えた室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できること」とある。近年の地震災害時に屋内での負傷がきわめて多いという事実からも、家庭科における同内容への取り組みは、防災教育としてきわめて大きな意義があると考えられる。

近年隣県が大きな自然災害を経験しているのに対して、山形県内はこれを免れ自然災害への危機感が薄く、防災教育が熱心に行われているとは言い難い（村山，2009）。生徒の（地震）災害への意識を高め、実際の行動を促すことを目指すものである。本実践は、山形市立第四中学校家庭科教諭伊藤美智子氏、鈴木貴子氏とともに、同校1年生を対象に行われたものである。

### 2. 単元と授業の構成

中学1年生家庭科「私たちの生活と住まい・安全に配慮した住まい（7時間）」のうち、最後の2時間を災害に対する住まいの安全にあて、このうち1時間めを大学教員による特別授業として発表者が担当し、2010年6月、2クラスずつ、計4回実施した。

特別授業は大きく3つの部分からなる。最初に、山形でも大地震発生の可能性のあることを、山形盆地西縁断層帯に関する情報とともに説明した。山形では地震自体が少ないため、初めてこのことを知る生徒も多くいると予想された。次に、同地震を想定した山形県による震度予測等を紹介した。プリンと羊羹を揺らすビデオを用いて、表層地盤による地震動増幅の説明を交えた。ただし震源からの距離が近いので、結果として学区内の想定震度は全域で震度6強である。その上で想定される被害（木造家屋、家具、ブロック塀）について、グラフと写真を用いて検討した。その他の被害（自販機、延焼火災、ライフライン停止）についても写真を提示した。以上をふまえて、地震防災について考えた。とくに自宅での準備行動を促すために、強震による家具転倒の危険を示す実験のビデオを見て、自分の寝室の安全（布団やベッドの位置の工夫、家具の配置の工夫や固定等）について、簡単な室内見取り図を描く作業を交えて考えるよう促した。授業の最後に、授業内容を要約し、自分や家族でやることで被害を軽減でき、すぐにできることもあることを確認した。家族と相談すること、中学生への期待として自分を守ることに加えて周囲の人びとを守ることを提示した。

特別授業の次にあたる本単元最後の時間では、教科書にある間取り図の拡大コピーを用いて、住宅の地震対策について班ごとに話し合い、その結果を発表しあった。本時は、本来の授業担当である伊藤氏と鈴木氏による通常の授業として行われた。

### 3. 評価とまとめ

特別授業開始前とその次の家庭科授業の際、および実践の約半年後に、簡単なアンケートを実施した。特別授業に関する反応は、おおむねポジティブなものと解釈できる。併せて約半年後の結果から、本単元の授業は、生徒の防災意識を高め、生徒の家庭における実際の防災（準備）行動をかなりの程度誘導したといえる。

特別授業の内容は明らかに家庭科の範囲を逸脱しているが、防災基礎教育（災害のメカニズム、地球科学もその一部）と防災実践教育（防災のノウハウ、本単元の内容は主にこれに相当）を結びつけることで、防災の必要性の理解および防災の具体的手段とその有効性の理解をふまえた防災行動の誘導が促進されたと考えられる。特別に多くの時間を使わずとも、地球科学的内容と結びつける等の工夫と併せて、家庭科における防災教育の可能性が高いことが明らかになった。

キーワード: 地震災害, 防災教育, 家庭科, 住まいの学習

Keywords: earthquake disaster, education for disaster prevention, home economics, education of housing